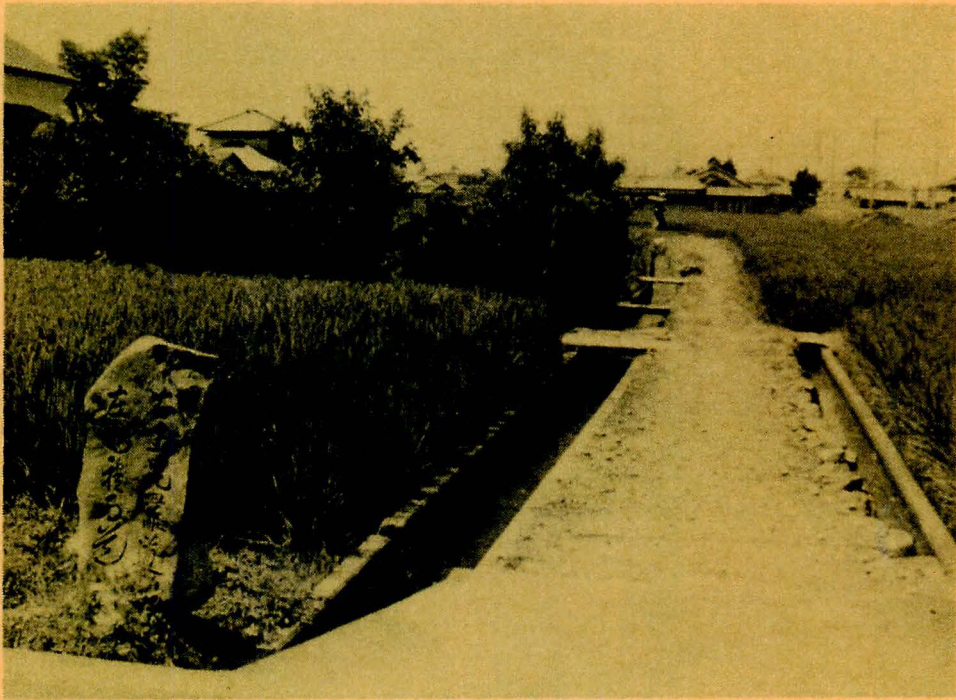


高校生地域文化交流事業研究成果

# 東温地区の旧街道



重信町立図書館 64-3414



00044589

東温高校地域研究部

(昭和63年10月)

# 東温地区の旧街道

## 1 研究の動機

東温高校の一角には、「遺跡金毘羅道」の記念碑が建っている。これは昭和49年3月の卒業生が、その卒業を記念して建立したものであり、かつてここに金毘羅街道が通じていたことを永久に保存しようとしたものである。その遺跡の傍らには、クヌギ林があり、そこに幅1 m余の細い道が今も残されている。これが藩政時代以来、大洲・宇和島地方から讃岐の金毘羅さんに通じていた街道であり、当時のこの地方の幹線道路の一つであった。

遺跡金毘羅街道のそばには、東温高校の同窓会館「櫛会館」があり、このあたりは東温高校生の憩いの場所でもある。このあたりを散策していると、私達はこの金毘羅街道が、ここからどこへ通じていたのか調査してみたいとなった。そこで東温高校地域研究部では、今年の研究テーマを街道の変遷と集落の盛衰に定め、その一環として、この金毘羅街道をはじめとした旧街道を復元しようとしたのである。

## 2 研究方法

東温地区の旧街道がどこを通っていたかを、調査するにあたって、私達は次のような方法を採用した。

### ① 明治36年実測の1/5万地形図による予察

松山平野の1/5万地形図で最も古いものは、陸軍測地部が明治36年に実測したものである。この地形図は、現在地形図を発行している建設省国土地理院に保存されているので、その使用目的をもって申請すると、そのコピーを頒布してもらえることになっている。四国の道路は明治36年現在では、そのほとんどが藩政時代の道路を踏襲していたので、この地形図を検討することによって、旧街道がどのあたりを通っているかを、ほぼ推察することは可能であった。



↑ 東温高校内に残る金毘羅街道  
← 東温高校内の金毘羅街道の記念碑

## ② 文献による従来の研究成果の検討

私達と同じように旧街道に関心をもった先学は多く、すでに旧街道に関する研究は数多く公表されている。その代表的なものをあげれば、昭和48年に出版された愛媛新聞社の「旧街道」、村上節太郎氏の「伊予路の金びら道標」などであるが、他に、愛媛県史地誌Ⅱ（中予）、川内町誌、重信町誌、久米村誌、久谷村史などにも、旧街道に関する記事が散見される。これらの文献の検討によって、東温地区の主要旧街道には、三本の幹線道路があったことがわかった。しかしながら、大縮尺の地図上で、あるいは現地において、旧街道がどこを走っているかは、必ずしも判然とするものではなかった。

## ③ 実地調査

私達の調査で最も重視したのは、実地調査である。実地調査はゼンリンの住宅地図をたずさえて、各集落の古老に案内してもらった旧街道を、その住宅地図に記入する方法をとった。旧街道について、それがどこを走っているかを知っているのは、ほとんど70歳以上の方々であり、しかもこれら古老も、自分の住む集落をこえると、もう旧街道を復元することは、ほとんど困難であった。したがって、実地調査は各集落ごとに、古老を訪ね、地をほうような方法でもって行った。また旧街道沿線には、石の道標や常夜灯がいくつも点在していたが、これらの位置も正確に地図に記入していった。かくして約70名にも及ぶ古老からの聴取調査をも含めて、150時間程度にも及ぶ実地調査によって1/5,000の国土基本図の上に旧街道を復元することができた。

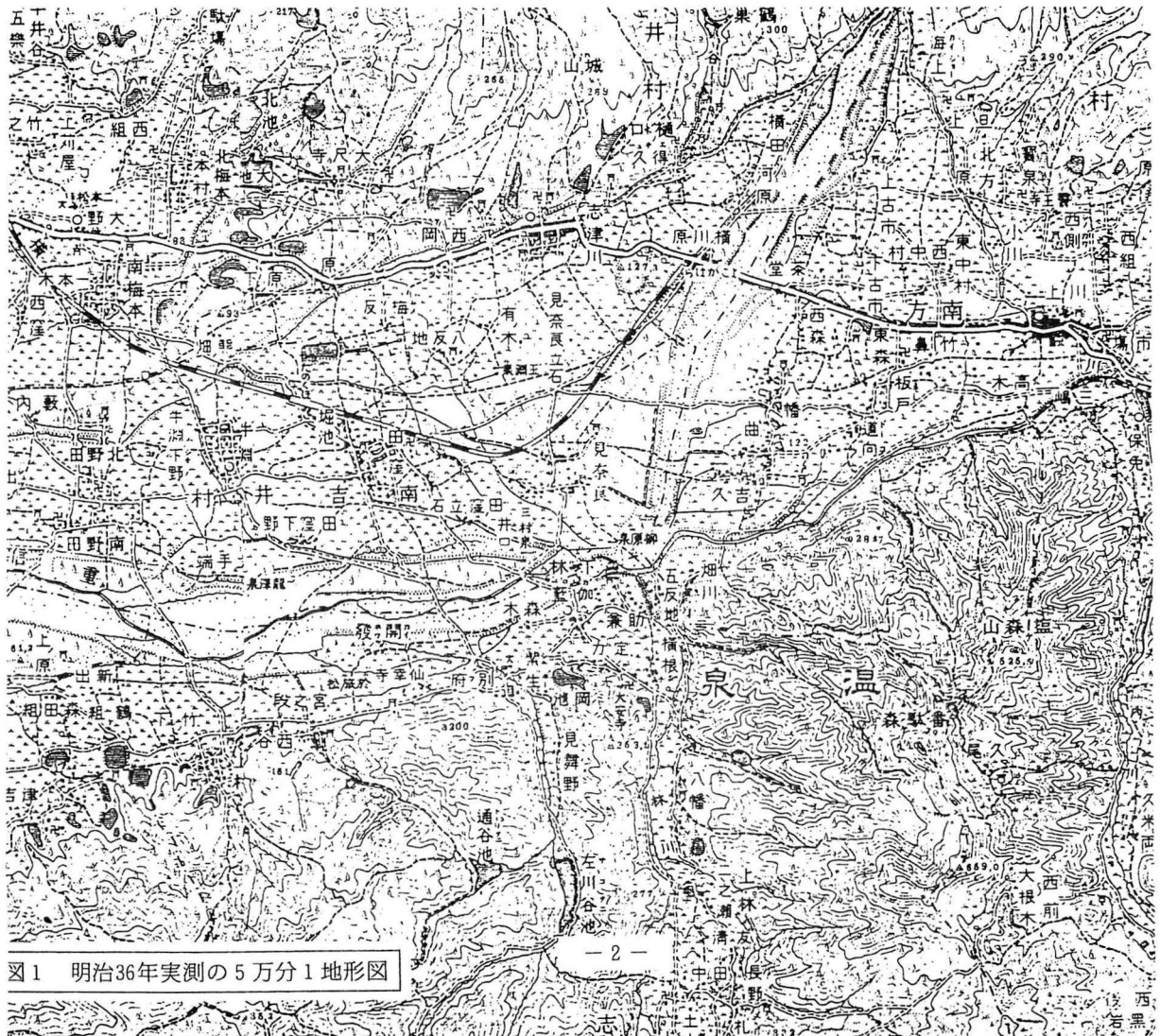


図1 明治36年実測の5万分1地形図

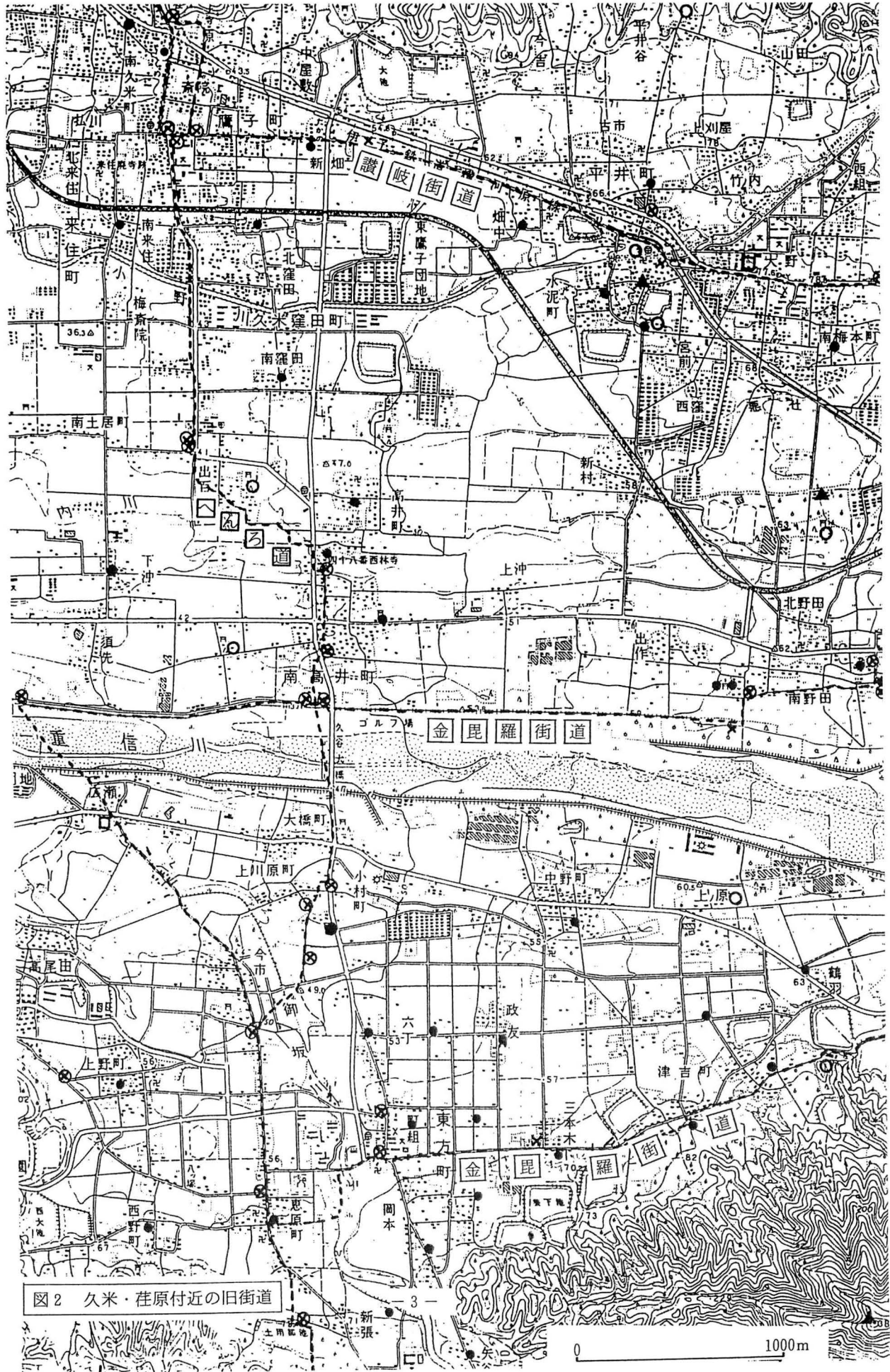


図2 久米・荏原付近の旧街道

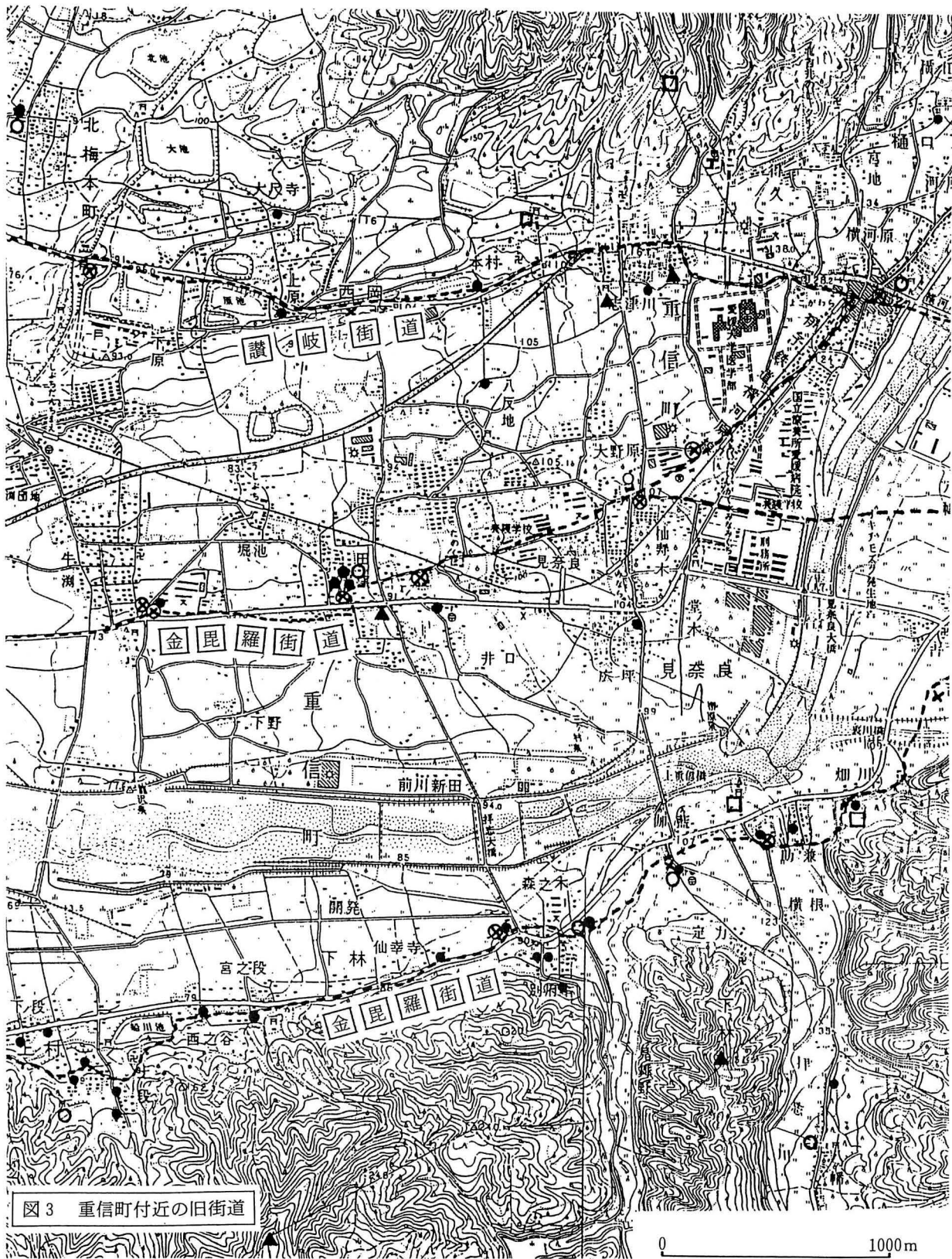
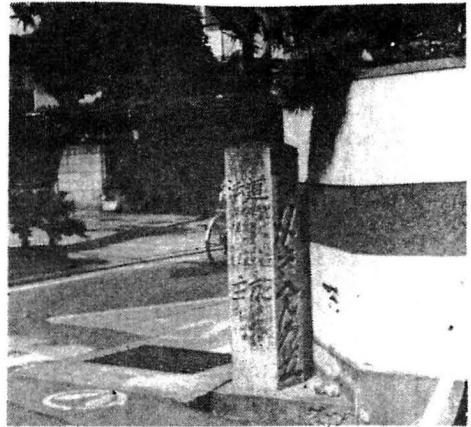
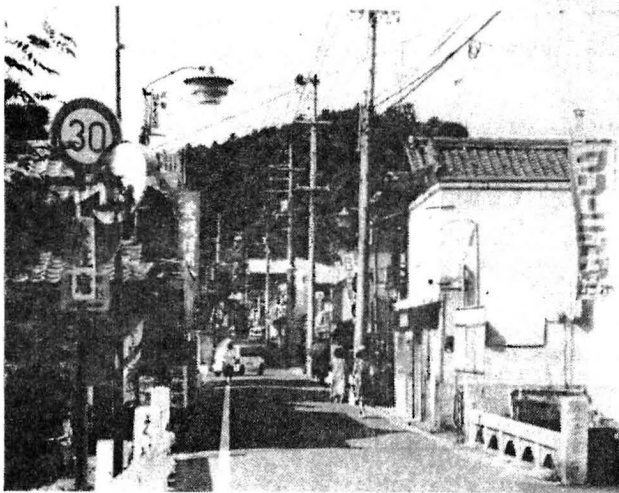


図3 重信町付近の旧街道

- - 旧街道
- 金毘羅さんを祀る社・祠
- ⊗ 道標
- 和霊さんを祀る社・祠
- × 紛失した道標
- ▲ 石鎚大権現を祀る社・祠
- 常夜灯

(図2~5の凡例は同じである)





↑ 三輪田米山の筆跡を示す久米の道標  
← 久米日尾八幡神社前の街村

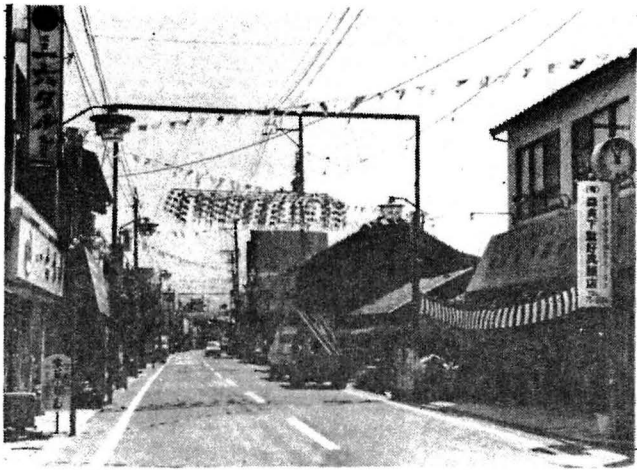
### 3 旧街道沿線の景観

東温地区とは旧温泉郡東部の地区を指し示す地域名称である。私達は東温地区を松山平野を南北に走る旧へんろ道の東側、すなわち松山平野の東部に限定した。ここでは東温高校生の多くが通学してくる範囲であり、私達の関心の深い地区でもある。松山平野の東部には、東西に走る三つの旧街道がある。その一つは松山城下から久米・川上を通り、中山越にて周桑平野に通じる讃岐街道であり、その二は、森松より横河原・川上に至る金毘羅街道であり、その三は、旧荏原村より旧拝志村を経て川上に至る第二の金毘羅街道である。ここではその三つの旧街道について、その沿線をたどり、景観上の特色を述べてみたい。

#### (1) 讃岐街道（久米～川上間）

この街道は松山と讃岐を結ぶ街道であり、松山平野を東西に横断する旧街道のなかでは最も重要なものであった。この街道は金毘羅まいるの参詣者も多数通過したので、別名金毘羅街道ともいう。街道は松山城下の札辻に発し、桑原を経由して、久米の日尾八幡神社の下に至る。鳥居の前にはへんろ道の道標が立っており、浄土寺から通じるへんろ道が、ここから北では讃岐街道と合体していることを伝える。道はここから南に転じる。道路の両側には商店が帯状に並び街村を形成するが、ここはかつての日尾八幡神社の門前町であり、また讃岐街道の宿場町であったところである。古い商家が街道ぞいに並んでいる姿に往時の姿をわずかにとどめている。街道の中ほど、横河原線の踏切のそばに、寛政12年（1800）に建立された常夜灯が立っており、讃州金毘羅常夜灯という銘が刻まれ、ここからはるか東方にある金毘羅大権現に灯明を奉げたことがわかる。街村を南に下ると、街道はT字型の三叉路に至る。その左手に「従金毘羅大門29里」の道標が立っている。文化10年（1813）に古川村の住民が建立したと刻まれている。

三叉路を左に折れると、道は東に一直線に延びる。この道が川上まで通じる讃岐街道である。道を20mほど進むと、また三叉路に至る。ここは南から延びてきたへんろ道との交叉点であり、路傍に「右へんろ道、（他面に）ぎゃくへんろ道」の文字が刻まれた道標が立っている。彫の深い雄渾な筆致は、この地の生んだ書家、三輪田米山のものとする。文久2年（1862）地元の有力者が建てたものである。50mほど進むと、北に延びる道と交わるが、ここには嘉永2年（1849）に建てられた「左へんろ道、すぐ古んびら道」の道標が見られる。金毘羅まいるや、四国八十八ヶ所の巡礼者の<sup>ふくそう</sup>輻輳するこの



↑ 平井河原駅の開設と共に形成された平井商店街



播磨塚に立つ「金毘羅大門より28里」の道標 →

あたりでは、道路の分岐点ごとに道標が見られ、ここに住む人々が通行人に暖い心づかいをしていたことがよくわかる。

このあたりの讃岐街道の道幅は3 m～4 m程度であり、ほぼ往時の姿をとどめているという。この道路は明治9年国道31号となり、大正9年には国道24号と改称される。昭和6年に日尾八幡神社前から平井橋までの直線状の新道(旧国道11号)が開通するまでは、この道路は松山～高松を結ぶ最も重要な道路であったのである。松山藩は主要街道ぞいに松山札辻を基点に里塚石を寛保元年(1741)に建立した。久米の鷹子には、「松山札辻より2里」の里塚石が立っていたが、大正末年から昭和初年ころ倒され、それは旧小野村の某家の庭に移築されている。どのような事情で移されたのかは判然としないが、大正年間に道路を改修した時の犠牲になったのかもわからない。

久米の中心地から2 kmにして、讃岐街道は平井の街村に至る。この街村は、明治26年伊予鉄の平井河原駅が開設され、その駅前集落として形成されたものであるが、それ以前にはわずか8軒の商店が点在するのみであったといわれている。平井に最初の商店が進出したのは、平井橋のたもとに明治5年畑中から辰次という人が進出し、三文店を開店したことに始まるという。明治中期までの平井は、街道北側は水田と畑、南側はクヌギ林であり、そのクヌギ林は近隣集落平井谷・刈谷・畑中の入会の採薪林であったと伝える。明治26年以降街道ぞいには商店が次第に進出し、今日見るような街村が形成された。大正中期の商店の構成を古老から聴取調査によって復元すると、商店数は42軒であり、食料品店、日用雑貨品店、鍛冶屋、鋤屋、木挽、紺屋などが目だったが、なかには呉服店などもあった。また、人力車・荷馬車などを営業するもの、さらには宿屋も3軒あり、ここが一時期交通の要衝となったことを示している。街村の中ほどには平井谷の子安観音への道が分岐し、「観音道」の道標が立っていたが、現在は旧国道11号ぞいに移動している。また、明治33年に木橋の架った平井橋の南のたもとは、明治21年建立された「左金刀比羅道」の道標が立っていたが、大正12年の水害で流れ、その後紛失したという。平井橋を渡ると、旧道は鉄道をまたぎ右手に折れるが、この一角は明治時代までの道幅がそのまま残されている。

平井から讃岐街道は現在の旧国道11号にそって重信町の志津川に至る。陸上自衛隊松山駐屯地のある播磨塚の台地にさしかかったところに、「金毘羅大門より28里」の道標が立っている。文政4年



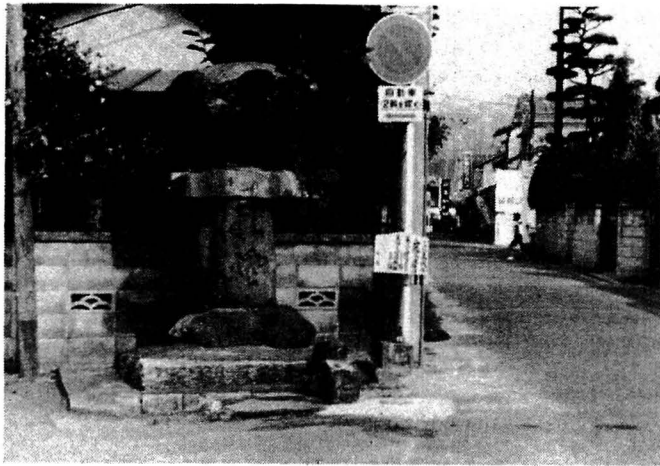


↑ 播磨塚の台地上にある西岡原組の常夜灯と地藏堂  
横河原の道標（右金毘羅道・左観世音道）→

（1821）に松山城下の商人竹島祐右エ門が願主となって建立したものと記されている。道をしばらく進むと原池の畔にさしかかるが、ここにはクヌギの巨木が並んでいる。かつてこの付近にはクヌギ林があり、昔の面影をとどめているといえる。クヌギ林のつきた道路の南側には村の安全を祈る石地藏と共に常夜灯が立っている。和泉砂岩の自然石で造られた常夜灯には、「象頭山・石鉄山」と表面に刻まれている。象頭山とは金毘羅大権現の鎮座する山であり、石鉄山とは石鎚山のことであり、この常夜灯が金毘羅さんと石鎚山の信仰のために街道ぞいに建立されたことがわかる。台地を下ると天神橋にかかるが、ここには「松山札辻より3里」の里塚石が立っていたというが、いつの頃からか紛失し、その所在は不明である。

西岡本村の集落では旧道は国道11号から離れ、その北側を通るが、それはわずか500 m程度であり、また国道11号と合する。国道ぞいの集落が志津川であり、道路に沿う街村形態の集落となっている。古老の伝承によると、この集落は元来内川の北側の山麓部に立地していたが、藩政時代の初期に南方の荒地が新田に開かれると共に、街道ぞいに移動してきたという。街道に沿っては商家の米田屋をはじめ、紺屋、おかだ屋、茶屋などという屋号をもつ商家があったが、現在はほとんどその名残をとどめていない。街道ぞいには、集落の西端に下市地藏、集落の東端には上市地藏が祀られており、志津川の住民の平穏を祈っている。

志津川の上市地藏から横河原に至る国道11号は大正12年に開通したものであり、それ以前の讃岐街道は、ここから南に折れて愛媛大学医学部前の小道を通り、横河原の重信農協北吉井事業所前に至っていた。農協前には若宮社を祀る祠があり、そこに二本に分れた巨松があったので、この地は古くは二本松と呼ばれていた。横河原は明治32年伊予鉄横河原駅が開設され、その駅前集落として発展してきたところであるが、それまでは一面にクヌギ林のおおう荒地が広く見られた。鉄道開通以前には、わずか2～3戸の寒村であったが、鉄道開通と共に旧街道ぞい、さらに駅前から旧街道に至る間に商店が並び、川上・平井をしのぐ東温地区最大の商業集落に成長する。古老の記憶によって大正末期の集落を復元してみると、商工業を営む家は36戸を数える。住民は近隣の樋口、志津川、吉久、川上などから進出してきた者が多かったが、遠くは周桑郡や新居郡の加茂村などから移住してきた者もいた。集落の構成は平井と類似し、食料品店、日用雑貨品店、鍛冶屋、宿屋などが多く、他に運送業に従事



↑ 川内町茶堂の常夜灯と折れた道標

常夜灯の前の道標には七里の文字が認められる

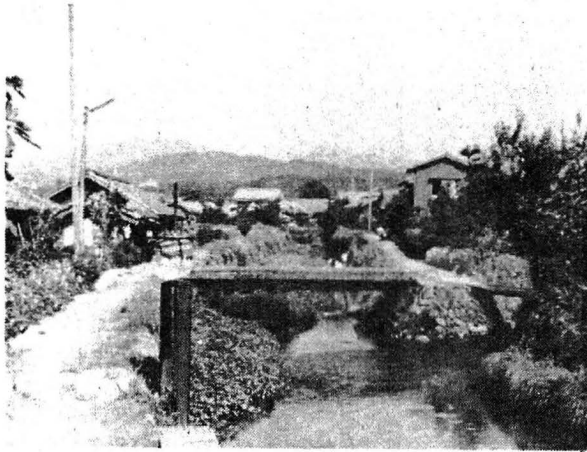
川内町齊院ノ木にある「松山札辻より四里」の里塚石 →



する者も多かった。横河原駅の北東の十字路は讃岐街道と金毘羅街道の分岐点となっており、現在の和田ガラス店の角には「右御城下道、左大洲宇和島道」の道標が立っていた。金毘羅まいりや石鎚登山から松山、あるいは宇和島方面に帰る旅人に、ここが道路の分岐点であることを示していたのである。この道標によると、讃岐街道あるいは金毘羅街道は、松山方面から讃岐方面に向う人が呼ぶ街道の呼称であり、反対に、松山に向う人は松山御城下道と呼んでいたことがわかる。この道標は大正12年新国道が集落の北側に開通すると共に、新国道の分岐点である相原薬店前に移されたが、昭和47年ころ盗難にあい紛失した。現在この道標は松山市内のある飲食店前に建っているのが確認されている。この道標のあった地点から40mほど東に進むと「右金刀比羅道27里1丁、左観世音道2里34丁」の道標が立っている。観世音道とは重信川の源流近くにある福見山への道を示すものである。

横河原の集落をすぎると重信川に達する。荒川で有名な重信川には、大正8年に至るまで橋はなく、通行人は人足の助けをかりるか、自力でもって川を渡渉せざるを得なかった。人足による川渡しは、川水の水量によって背負ったり、肩車にしたり、4人がかりの乗せ台にのせて渡したりしたという。また降雨によって水量が増すと川止めになることもしばしばあったという。大正8年に架設された木橋は現在の横河原橋の下手にあり、ここが藩政時代以来の讃岐街道の渡渉点であったのである。木橋の上手に現在のコンクリートの永久橋が架設されたのは、昭和5年のことであった。

重信川を渡ると川内町の茶堂に至る。道の北側の重松自動車商会のあたりが、かつての川渡しの人足のたまり場であったという。そこから旧街道は国道を離れ、しばらくその北側の小道を通る。そこには、和泉砂岩の自然石を利用した常夜灯が立っている。表に献燈と刻まれており、明治18年の建立である。その傍らには「金毘羅大門より27里」の道標が立っていたが、第2次大戦後根元から折られ、盗難にあったという。現在はわずかに七里の文字のみが認められる。旧道はまた国道11号と合し、齊院木に至る。道路ぞいにエノミの巨木が天をついてそびえているが、これは旧街道を旅する人々が木蔭を求めてしばしの憩いをしたところであったという。そこから東に道を進むと灌漑水路ぞいに「松山札辻より4里」の里塚石が立っている。久米から川内町の土谷に至る間には、2里から6里に至る里塚石が明治年間にはみられたが、その所在地に立っているのは、わずかにこの道標のみである。この里塚石も、道路の改修・拡張のたびに、たびたびその位置をかえたが、ここに住む江戸氏の努力に



川上小学校東方の宝泉川にそう旧讃岐街道  
道路の幅は1.5 mである。



川内町松瀬川西組の常夜灯

金・石夜灯 文化2年(1805)の銘がある。

よって、紛失の難をまぬがれたものという。旧道はここから国道と別れて、川上の旧市街へと通じる。川上小学校の東側では旧道はさらに北側に迂回し、宝泉川の土手にそって走る。このあたりは藩政時代の道そのままの姿でとどめているところであるが、その道幅はわずかに1.5 m程度にしかすぎず、通行人がやっとすれ違いのできる程度である。

## (2) 金毘羅街道(森松～横河原間)

大洲・宇和島地方の人々が松山平野を經由して讃岐に行くのが、この金毘羅街道である。この街道は八倉と森松の間で重信川を渡り、重信川の右岸にそって横河原まで至り、前記の讃岐街道と交わるのである。森松の街村の西に夫婦泉があるが、その泉の少し東側で、松山から高知に至る土佐街道とこの金毘羅街道は交わっている。この三叉路のところには、二本の道標が立っている。一本は「松山札辻より2里」の土佐街道の里塚石であり、他は「さぬきみち 川上江3里、大洲宇和島道 郡中へ百丁」の金毘羅街道の道標である。この道標からして、この金毘羅街道も、一名讃岐道ともよばれ、また逆に向う場合は大洲宇和島道と、通行人の向う方向によって呼び分けられていたことがよくわかる。

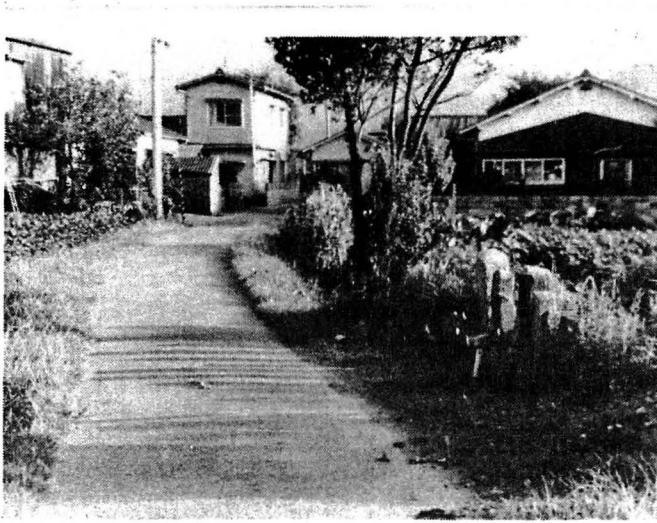
旧道は森松の街村を横切ると新田の集落で重信川の堤防に出る。しばらく行くと尾海家の前に「上こんびら道」の道標が立っている。ここは土佐街道が重信川を渡る広瀬の渡しのあったところであり、金毘羅街道はここから土佐街道とは別れ、一路重信町の南野田まで重信川の土手をさかのぼっていく。

森松～南野田の間には高井の集落があり、この地点には重信川に久谷大橋が架設されている。橋の手前には、堤防の下に2本の道標が立っている。その片方の道標には「金毘羅大門江29里、へんろ道西林寺3丁」と刻まれており、ここが金毘羅街道とへんろ道の分岐点であることを示している。



森松の道標

金毘羅街道と土佐街道の交わる地点



↑ 高井のへんろ道の路傍の無縁仏の墓

重信町南野田の道標 →



へんろ道はこの道標の南で重信川を渡るのであるが、橋のない重信川を渡るのは難行であったとみえ、溺死者を出すこともしばしばあったという。二本の道標の間に通じるへんろ道を西林寺の方に北上すると、路傍にいくつかの墓が並んでいる。これらはいずれも行き倒れとなった巡礼者などを葬った無縁仏の墓である。

重信川の堤防を南野田に至ると、道はそこで左に折れ南野田の集落の内にと入る。その左折点の堤防には、野田立石という自然石が立っており、そこは金毘羅まいりや石鎚登山する旅人の休息地となっていたという。お山開きの間、石鎚山におまいりする信者はここにあった泉で水垢離をして、登山する者が多かったという。南野田の中でな旧街道は4回もL字型に屈曲する。その最初の曲り角には、道標と常夜灯が並んで立っていたが、昭和10年に道路の拡張にともなって、道標は道の反対側に移動し、常夜灯は近くの素鷲神社の境内へと移動した。文久3年(1863)に建立されている道標には「右金毘羅道、左和霊社道」と刻まれており、宇和島街道は別名和霊社道ともよばれ、宇和島の和霊神社への参詣者の西行する道でもあったことがわかる。3回目の曲り角には、今も常夜灯と道標が立ち、往時の旧街道の面影を色濃く残す。常夜灯は文化13年(1816)和泉砂岩の自然石をもって造られたものであり、その表面には、金・氏・石の三文字の下に奉燈と刻まれている。金は金毘羅さん、氏は氏神さん、石は石鎚山の略称であり、これらの三神に灯明をささげるためにこの常夜灯が集落の住民によって建立されたことがよくわかる。一方、道標には、「左金毘



↑ 重信町南野田の道標と常夜灯



↑  
重信町牛湊の道標と常夜灯



↑ 重信町田窪の新道（左）と旧金毘羅街道（右）

羅道」と記されており、その側面には「村中安全文久3年亥年3月」と刻まれており、さらに世話人3人、施主9人の名前が書かれている。施主・世話人ともに地元野田の住民であり、この道標が地元の有力者によって村の安全を祈願して奉納されたことがよくわかる。ここから道を50mほど北に進むと、道路の分岐点に和泉砂岩の自然石に刻まれた「右金毘羅道、左は禮為道」の道標（表紙写真）が立っている。この和霊道の示す方向には、幅1m程度の細い農道が通じているが、これをたどると、北野田の常夜灯に至る。その先には和霊さんをまつる祠はないので、この道標の示す意味は充分には判らない。

旧街道は南野田の集落の北東部で県道森松重信線に合する。ここから牛湊の浮嶋神社の前までは、この県道がかつての旧街道を拡幅したものであり、その工事は大正11年から大正末年にかけてなされた。浮嶋神社から北東に延びる小道が南吉井小学校の方向に向うが、これが旧街道の名残である。小学校の手前には、道標と常夜灯が立っている。道標には「従金毘羅大門28里、文化11年（1814）」の文字が刻まれている。常夜灯には、「金毘羅・金鉄山常夜灯、文化6年（1809）、願主村中世話人・大西伸治、大西嘉之右エ門」の文字が刻まれている。旧道はここで南吉井小学校の中に通じていたわけであるが、今は運動場にとりこまれて消えている。

その旧街道が再び顔をのぞかすのは、田窪の集落の西端である。県道の南に水田の中に畦道のように走っている幅2mたらずの細い道が、かつての旧街道であり、それは田窪の宇気洲神社の南100mのところまで、人家の間をぬって通じている。金毘羅街道は八合道（一間の8割の道幅）と古老が語っていたが、このあたりは、その八合道をそのまま残しているところである。旧街道は北に転じ、宇気洲神社のところに至る。ここには「右金毘羅道」の道標が立ち、道はここから東方に転じていることを示している。宇気洲神社から香積寺にかけての旧街道ぞいは、金毘羅街道ぞいの小宿場町として賑わったところであり、幕末には6軒の宿屋を含む11軒の商家が並んでいたという。この宿場町は明治中期以降、すっかり衰退し、現在は古老の伝承にのみ、その名残をとどめるのみである。

香積寺からは東温高校に至る町道が、ほぼ昔の旧街道にあたるが、この道は正確に旧道を踏襲しているものではない。第一養護学校と重信中学校のところでは、旧街道は両校にとり込まれ、今はその姿を消している。重信町役場前で姿を現わした旧街道は、また東温高校の校地内に没し、校庭の北東



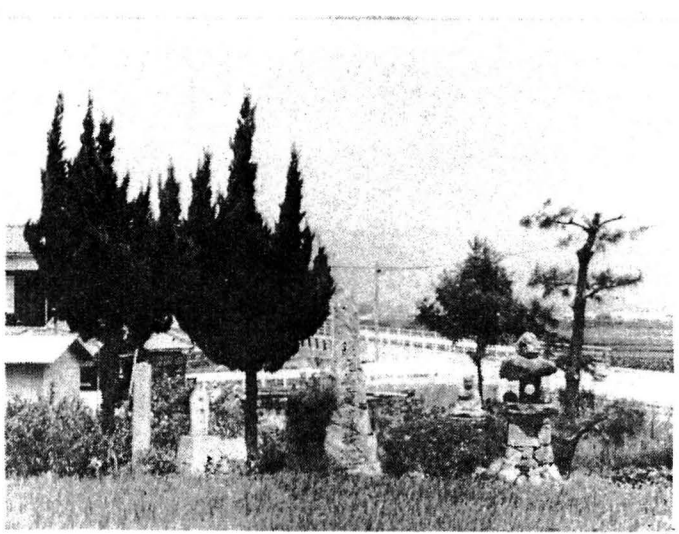
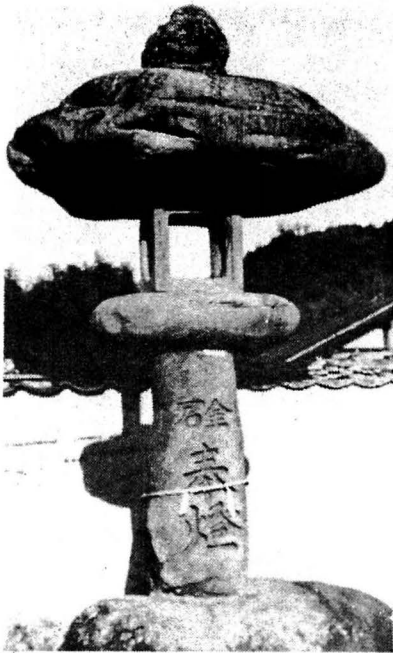
↑ 見奈良立石といわれた相原隣二郎氏宅にある道標  
松山道を示す松山市上野町一木の道標 →

隔にわずかにその遺跡を残すのみである。見奈良は重信川扇状地の扇尖にあたり、水不足のこの地は荒地の広く展開するところとして有名であった。一面にクヌギ林の広がるこの原野には、田窪から横河原に通じる金毘羅街道、見奈良の集落から志津川に通じる里道が、現在の重信町役場前で交叉していた。そこはまた、東に延びる八幡渡しへの分岐点でもあり、さらに西方の八反地から延びてくる道路も交わり、複雑な交通の分岐点であった。明治36年の地形図を見ると、1軒の人家もない原野の中に見奈良立石の文字が記されている。その立石は東温高校の運動場の南西端にあたる道路の分岐点に立っていたという。さがし求めると、それは役場前の相原隣二郎氏宅の庭内に横たわっていた。明治30年見奈良の集落住民の建立したもので、「左讃州金刀比羅道」の文字が刻まれている。東温高校の校庭を抜けた旧街道は、伊予鉄横河原線を横切り、横河原の集落に至るが、線路の踏切りから県道松重信線に至る間は、旧道の道幅がそのまま残されている。

### (3) 重信川南岸の旧街道（荏原～川上間）

松山平野東部を東西に横断する旧街道には、重信川の南岸を通じる第三の街道があった。この街道は、久万、砥部、荏原方面の住民が金毘羅まいりや石鎚登山に行く街道であり、金毘羅街道と呼ばれていた。第一・第二の金毘羅街道が西行に関しては、松山御城下道とか、大洲・宇和島街道と呼ばれたのに対して、この街道には西行に対して適格な名称はなかったとみえ、道標や古老の話の中にその呼称を求めることはできなかった。

この旧街道は、三坂峠から下る土佐街道、あるいはへんろ道と旧荏原村で合するわけであるが、どこでその道と接続するかは、多くの里道があって判然としない。砥部方面との連絡道は恵原の街村で、久万方面との連絡道は久谷川の右岸に通じる東方の矢谷・井関を經由する里道で、それぞれ接していたようである。東方の渡部家の前の十字路には嘉永元年（1848）に建てられた「こんびら大門ヨリ29里、是ヨリ西林寺へ18丁」の道標が立っているので、ここらあたりが、荏原地区の金毘羅街道の要路であったことは十分に推察される。三本木にも昭和20年ころまでは自然石の金毘羅道と誌した道標があったというが、現在は存在しない。ここらあたりの明治年間までの旧道は3尺道といわれ、1m未満の細い道であった。それが一間道（1.8m）になったのは明治末年の耕地整理の時であり、さらに



↑重信町別府の道標、餓死萬霊供養塔、常夜灯  
←重信町宮之段の常夜灯

昭和8年ころに3.6m程度に拡幅されて今日に至っているという。津吉には屈曲した旧道が一部残存しているが、それは幅1m未満の細い道である。津吉の東端には徳川神社があり、ここには金刀比羅宮を合祀しているが、これはもと津吉の山中にあったものという。

徳川神社のシイの繁る林を抜け、源平谷池・平尾池の土手を抜けると、洪積台地上の重信町上村の上ノ段の集落に至る。上村は戸数100戸余の集落であり、それは7つの小組に分れているが、各小組ごとに常夜灯があり、その分布密度は松山平野随一である。旧道ぞいには寛政10年(1798)に建立されたこの街道ぞい最古の常夜灯もあるが、他は明治20年代に建てられたものが多い。常夜灯の多くは、金・石常夜灯と書かれているので、金毘羅さん、石鎚山に灯明を奉げるものであるが、このように分布密度が高いのは、集落内の金毘羅さんを祀る社があり、また背後の山に石鎚大権現を祀る祠があることと関係しているものと思われる。

船川池の土手を下ると下林の宮之段の集落に至る。旧街道は県道原町川上線南側の細い道をたどるが、この沿線には、天保8年(1844)と昭和10年に建立された二つの金・石常夜灯が立っている。築島神社あたりで旧街道は県道に合するが、この県道は大正3年拜志・川上・荏原の3ヶ村が道路組合をつくり、里道改修によって建設された道路であり、大正10年県道に認定されたものである。県道として拡幅利用された旧道は、拜志小学校の手前でまた県道とたもとを分つ。その分岐点のところには、文化10年(1813)に建立された「従金毘羅大門28里」の道標と無銘の常夜灯が立っている。他にこの地点には、石地藏、餓死萬霊供養塔、三界萬霊が立っており、石造建造物の一大絵巻をくりひろげている。餓死萬霊塔は享保17年(1732)の大飢饉による死亡者の50回忌を村で行い、その時に建立した供養塔である。松山平野には、ほか各地に同種の供養塔が立っている。

拜志小学校の北側で旧道は県道と交叉し、山手側の細い道をたどる。しばらく行くと<sup>しば</sup>紫生の集落に至るが、ここには路傍に合掌造りの草ぶきのお堂と無銘の常夜灯がある。神棚には、金毘羅さんと若宮さんを祀っているという。3月10日の金毘羅大権現の祭日には常夜灯に灯をともし、お堂でお祭をしていたが、昭和の初期にはその風習もすたれていった。また7月1日から10日の石鎚山のお山開の期間にも常夜灯には灯をともし、石鎚登山の信者にはここでお酒の接待をしたとのことである。石鎚



↑ 重信町下林紫生の金毘羅さんと若宮さんを合祀するお堂  
重信町伽藍の金毘羅さん →



講の信者の中には、このお堂を宿泊所に利用するものもあったという。このような風習も昭和の初めころには次第にすたれていったという

旧街道は水田の中の三尺道をたどり伽藍<sup>がろう</sup>の集落に至る。旧街道が県道松山美川線と交叉するところには「右こびら道」の道標が立っていた。これは昭和50年ころ県道原町上川線のスーパーたかはしのところに移築したところ、数日にして夜中に盗難にあい行え不明となったという。伽藍の山手には金毘羅さんを祀る社があり、その前に、「大権現夜燈、寛政13年(1801)」の常夜灯が立っている。第2次大戦前には、1月10日、10月10日の金毘羅さんの祭日、7月1日の石鎚山のお山開の時には、灯明を奉げていたという。

旧道はここから水田の中の細い道を通り、助兼、五反地を経て、川内町の畑川に至る。畑川の集落の中心地には旧道に沿ってお堂と常夜灯がある。このお堂には和霊さんが祀られており、今日も7月23日の宇和島和霊大祭のときには、組中で和霊さんのお祭が行なわれている。旧街道は金毘羅さんや石鎚山の信仰の道であると共に、また和霊さんの信仰の道でもあったことがわかる。和霊さんのお堂から旧道を50mほど東に進むと、路傍に「沙界霊」と刻んだ自然石が立っている。土地の古老の語るところによると、無縁仏の霊をとむらっているものという。旧道はここから表川を渡って吉久に向うが、表川には昭和12年まで橋がなく、金毘羅まいるの通行人などは、しばしば流れに足をとられ溺死+



川内町畑川の和霊さんを祀るお堂と常夜灯





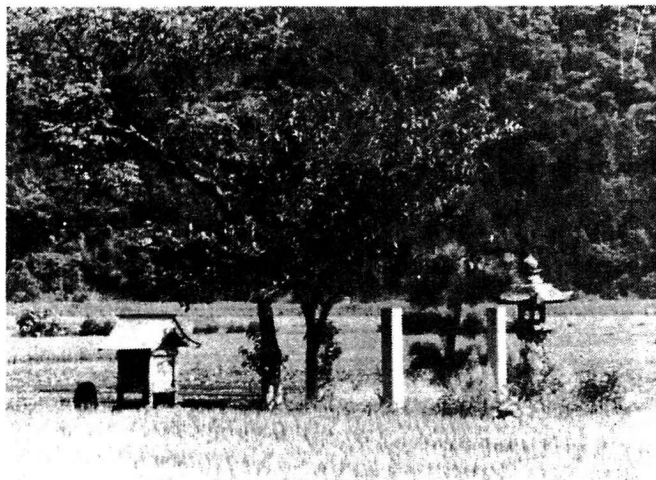
↑ 川内町畑川の沙界霊

↑ 表川の堤防でくりひろげられる百八灯

したという。「沙界霊」はそれらの無縁仏を村人がとむらっているのである。8月24日には昔の表川の渡し場の堤防で百八灯の行事がある。これは女竹を束ねた108の<sup>さいとう</sup>斎灯に灯をともし、無縁仏の霊をまつるのである。土手にともされた灯の間を、子供たちは「太郎も来い、次郎も来い」と叫びながら、無縁仏の霊を川面に呼び集めるのである。

表川を渡った旧道は、吉久から曲里、道向、竹ノ鼻、川上へと北東に道をたどる。この間の道路は屈曲の多い水田の中の小道であり、藩政時代のままの道幅を保っているところも多い。沿線には常夜灯や石地藏も多く残されている。曲里には石鎚山を祀る祠と、金毘羅さんを祀る祠が旧道近くにある。共に石鎚山のお山開と金毘羅さんの大祭の時には地元の住民によって祭がいとなまれる。道向では、重信川の右岸に通じる金毘羅街道からの近道八幡渡しの枝道が合するが、その会合点付近に大きなムクの木がそびえ、その根元に荒神さんを祀る小さな祠がある。傍らには草ぶきのお堂もみられる。このお堂は村の祭日にかぐらを奉納したり、道向の集落のお通夜の場所に使われるが、また金毘羅まいりや石鎚登山の信者の一夜の宿泊所ともなったところであったという。

この第三の金毘羅道ともいうべき、重信川南岸の旧街道は、三つの旧街道のなかでは交通量の最も少ない街道であった。しかしながらそれだけに旧来の面影を残しているところが多く、また、昔の伝統的行事や信仰が沿線には数多く残されている風情のある旧街道であるといえる。



← 川内町道向

金毘羅さんを祀る祠と常夜灯



↑ 旧金毘羅街道にそう川上の街村

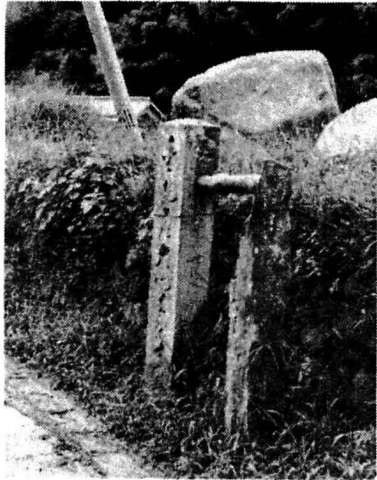


↑ 川上の金毘羅道標

#### (4) 中山越え（川上～土谷）

松山平野を横ぎる三つの旧街道は、平野東端の川上に至って一本の道に合する。川上は渋谷川の形成する扇状地の扇端に立地し、飲料水に恵まれていた。そのうえ山地と平野の接点に位置し、両地域の物資を交換する上に好都合な地点であった。集落発達の好条件のそろう川上は、交通の要衝の地にもあたり、藩政時代から松山平野東部の商業集落として、また金毘羅街道の宿場町として大いに繁栄した。藩政時代末期から明治維新ころのものと推察される絵図によると、川上には宿屋などを合せて22戸の商家が並んでいる。明治32年、伊予鉄が横河原まで延びてきて、そこに横河原駅ができると、東温地区の商業の中心地は次第に横河原にととってかわられる。さらに国鉄が昭和2年松山まで延長されると、それまで中山越えにて、石鎚登山や金毘羅まいりにおもむいていた徒歩の旅人は激減し、宿場町としての川上は壊滅的な打撃を受けることになった。現在の川上の旧街道を歩くと、往時の姿は街村形態の集落や古い屋号をつけて商いを続ける旧家などにわずかにしのぶことができる。街の一角、菅野建材のたたずむところは、昔の旅籠米田屋のあったところであり、その傍には、旅籠に利用していた草葺の家屋が一軒残っている。その隣の米田屋自転車店は、米田屋の末裔であり、先代や先々代の宿屋として賑っていた時代の話をお聞かせしてくれる。昭和の初期までは、石鎚山のお山開の期間は沢山の石鎚講の信者が先達につれられてここに宿泊し、石鎚山に向ったという。前の小川には注連がはられ、そこで信者は白装束にて水垢離をとったという。道はここで二つに分れる。川ぞいの道は明治末期に建設されたものであり、左側の急坂を登る道が旧金毘羅街道である。分岐点には嘉永3年（1850）建立された「左讃州金毘羅道、従大門27里、願生米田屋仙助」の道標が立っている。花崗岩の切石が真新しいのは、第二次大戦後、古いものを伊予鉄に提供し、その代替物とのことである。

旧街道は坂をあがり、吹上池の方にと上っていく。川上神社の前を過ぎると、左に河之内道が分岐する。その分岐点には「左讃州こんびらみち大洲領宮内邑、左名こへこんびらへ1里、世話人竹嶋祐介留市九〇」の道標が立っている。現在の砥部町宮内村の者が寄進したものである。吹上池を過ぎると川内ゴルフ場となる。そのゴルフ場の部分で旧街道は消えているが、現在2ヶ所の堀割の上に旧街道は通じていたという。ゴルフ場の丘陵を越すと、本谷川の形成する谷底平野の三軒屋に至る。嘉永4年（1851）の切石の常夜灯が荒地の中にとたたずんでいる。谷底には昭和初期に開通した道路が通じているが、旧街道はこれと離れたり、合わさったりしながら永寿橋に至る。その途中には細い旧道が



↑ 旧宿場町 檜皮の集落

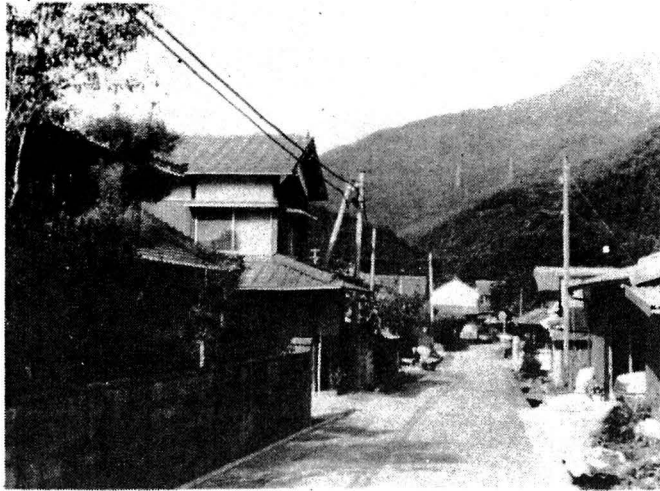
前方白い屋根の向うの鞍部が檜皮峠

← 川内町三軒屋の旧街道ぞいの道標

現在の自動車道より左手の水田の中を走っているが、そこには弘化4年(1847)に建てられた「金毘羅大門よ梨26里」の切石の道標と、「大門迄26里」の自然石の道標がたたずんでいる。永寿橋のたもとは、「松山札辻より5里」の道標があったところであるが、それはいつ紛失したか古老の記憶の中にも残っていない。

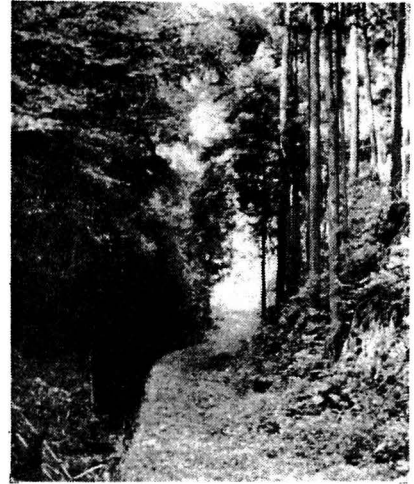
ここから旧道は現在の自動車道と合するが、1 kmさかのぼると、檜皮の集落に至る。道路に沿って並ぶ民家は宿場町の面影を残すが、明治初期に宿屋を営んだという家は古老の記憶に1戸を数えるのみである。屋並のつきるところに道路の分岐点があるが、ここには自然石の「金毘羅道」を示す道標があったというが、昭和45年ころ、一夜のうちに忽然と消えたという。旧道はここから道を右にとり、急斜面をよじ登る。木立の中に道は九十九折れとなつて登り、七曲りと呼ばれていた。松山から金毘羅さんに至る最大の難所といわれてきたところである。わずかな木もれ日のさし込む坂道には石畳が敷きつめられており、旧街道の風情があふれている。しかし、この坂道は昭和55年ころから入口が雑草や灌木におおわれ、通過困難となってしまった。坂をよじ登ったところが、標高331 mの檜皮峠である。ここで旧街道は明治35年に開通した国道31号の自動車道と合するのである。この国道は大正9年には国道24号、昭和27年には国道11号と改称され、松山と高松を結ぶ要路であったが、昭和37年国道11号が峠の南に付け替えられて幹線道路としての役目を終える。峠には第2次大戦前には数軒の家があり、茶店も2軒あった。最後の家が移転したのは昭和44年であった。

旧街道はここから土谷までこの旧国道にそってだらだらと下る。土谷は中山川ぞいの谷底平野にたたずむ静かな農業集落であるが、明治年間までは、宿場町として栄えた集落である。現在も島屋、入口屋、松屋、新し屋、瀬戸、茶七、本屋などの屋号が残り、明治35年に国道31号の自動車道が開通するまでは8軒の宿屋が軒を並べていたところである。集落は上・下の二つに分れ、上手の集落を札場と呼び、ここには「金毘羅大門よ里25里、土州久萬山道、右名越金毘羅江1里」の道標が立っている。道標のところでは道は二つに分れ、道を右にとると、土佐・久万に通じる近道であり、河之内にある名越金毘羅にも通じることを示している。道標のそばにあるのが松屋で、ここは中山越えの松山藩主の休憩所であったという。下手の集落では茶七が最大の宿屋であった。河之内隧道近くにある千道休池は、この茶七の構築したものと伝える。土谷の集落は自動車道の開通後、宿場町から山間地の商業集



↑ 旧宿場町土谷の集落

土谷の集落のはずれ、山中に向う旧金毘羅街道 →



落、あるいは木材など物資の集散地としてしばらく余命を保ったが、昭和になってからは次第にさびれ、現在のような静かな農業集落となってしまった。

土谷の屋並がとだえたところに、和泉砂岩の大きな自然石が横たわっている。木もれ日をすかして見ると「左こんびらえ」の文字がかすかに読みとれる。ここには道中の安全を祈る石地藏が2体、岩窟の中に安置されている。旧街道はここから杉木立ちの中を山中にとよじ登る。しばらく登ると、かつて畑に開かれていた緩斜面に至る。ここに「松山札辻より6里」の道標が立っていたが、それを昭和6年国道ぞいに移築した。その道標は昭和36年ころ盗難にあい、今、消息不明である。旧街道はここから山越え、谷こえ、中山川ぞいに下っていく。「桜三里は源太が仕置き、花は咲くとも実はなるな」と歌われた中山越えの険路である。

#### 4 旧街道研究の意義

古老をたずねて聴取調査を重ね、地図をたずさえて実地調査を行いつつ、旧街道を復元していくなかで多くのことを知ることができた。その第1点は、旧街道が大まかには2点間の最短経路を結びながら細部にわたっては意外に屈曲の多い道であることがわかった。これは現在の自動車のための道路とは異なり、徒歩交通の時代の特色を示すものといえよう。第2点は、道路が平野部では高燥地を連ねて走っていることであった。それは治水のととのっていない藩政時代までは、集落が水害の少ない高燥地に立地していたこと、道路自体も、災害の少ない土地を選んで通じたことによるものと思われる。第3点は、旧街道の沿線には石柱の道標や常夜灯が多く分布することであった。道標には寄進者の名前が刻まれ、常夜灯には金・石の文字が刻まれ、それらが何のために建立されているかを教えてくれた。道標と常夜灯は通行人への道案内の役割を示すと共に、地域住民の金毘羅さんや石鎚山への信仰を示すものであることがわかった。第4点は、旧街道は経済交流の道というよりは、信仰の道であるということである。街道の名前に金毘羅街道、和霊道などという名称がつけられているのが、それを端的に示すものであるが、ほかに沿線には金毘羅さん、和霊さん、石鎚山などを祀る祠が意外に多く点在するのに驚かされた。旧街道は金毘羅さん、石鎚山、和霊さんへの参詣の道であると共に、



松山市内のある飲食店前の道標

かつて横河原の三又路に立っていた



旧小野村のある民家の庭先にある里塚石

かつて久米の鷹子に立っていた

それはまた、その信仰が伝播していく道でもあることがわかった。

この報告書は、旧街道の復元とその現況報告に重点をおいたので、以上に述べたような旧街道にまつわる多面的な問題については、ほとんど考察を重ねることができなかった。これらの諸点については、また別の機会に考察を深めたいと思っている。これらの課題を残してはいるが、現時点で旧街道を復元したことは、それなりに充分の意義を持っていると思う。それは旧街道がどこを通過していたか、その細部にわたる研究はほとんどなされておらず、それを記憶にとどめている70歳以上の古老が次第に少なくなっている折、その街道を正確に記録にとどめておくことは、旧街道研究の出発点となると思うからである。

研究活動を通じて、最も残念に思ったことは、篤志家や地域の住民によって奉献された道標の多くが、盗難などにあい紛失していることである。それらのなかには、現在個人の庭園や玄関先などに移築されているものが多い。これらの道標や常夜灯は、その所在しているところに存在してこそ、地域の歴史や文化を語るものであり、その地域の住民の生活にやすらぎを与えるものであると思う。その移築の経緯は問わないが、心ある人は、それを元の旧街道ぞいに返却し、そこでその地域の大切な文化財として保存するようしていただきたいものである。また現在保存されている道標や常夜灯は、その地域の人々によって、いつまでも大切に保存していただきたいものである。

この報告書に掲載した写真はいずれも昭和63年8～9月に撮影したものである。

この調査に主にたずさわったのは、東温高校の地域研究部の以下の者である。

篠崎純，中岡誠二，守口俊蔵，速水一弘，井上弘二，多田仁保，越智知也，池田良，備修，白石昇，篠森敏光，相原倫子，相原妃登美

指導者 地域研究部顧問

篠原重則